



(写真：ナザレ修女会礼拝堂)

阿佐ヶ谷教会



信友会会報

修養会特集 (2017年7月28-29日開催)

教会標語 「主はわたしたちに道を示される。
わたしたちはその道を歩もう」

修養会テーマ **さまよえる羊**

今年の夏は暑い日は少なかったのですが、広島、長崎の原爆と終戦記念日、それと御巢鷹山の記憶が私の中に暑さを刷り込んでいて、気持ちがつい「暑い夏」になってしまいます。

その夏が始まりかけたころ、信友会では三鷹のエピファニー館で修養会を開きました。例年になく多くの人が参加し、「迷える羊」をテーマに学び、語りの時を過ごしました。また修養会に参加できなかった方、予期せず体調を崩してしまった方もそれぞれの夏を過ごしたこととおもいます。

私たちはこれから迎える季節のいづれに喜んだり、また取り巻く環境の変化に思い馳せながら新たな時を刻んでいくことになるでしょう。

開会礼拝

「さまよえる羊のたとえから」

江原有輝子伝道師

信友会修養会の主題は、今年度の教会標語で、副題を「さまよえる羊」としました。

教会標語のイザヤ書2章2節については、主題講演に於いて古屋治雄牧師が話されるので、皆さんが思い描いている新約聖書の「さまよえる羊」に基づいてお話しします。



ルカ福音書15章1節以下に「見失った羊のたとえ」があります。ここでは、一匹の羊を見失った神さまが残りの九十九匹を残して必死に探します。なぜいなくなったかは書かれていないが、この羊を見つけた神さまは大変喜びます。この15章は、このさまよえる羊のたとえと「銀貨のたとえ」、「放蕩息子のたとえ」の三つのたとえで構成されていますが、いずれも失われたものを見出した神さまの異常なほどの喜びが書かれています。並行記事であるマタイ福音書18章10節からの箇所でも何故迷ったかは書かれていないが、ここでも神さまは残された九十九匹より迷った一匹の羊の事を喜ぶと言ひ、これらの小さな者が一人でも滅びることはわたしの御心ではないと言ひます。

10数年前に、若者たちの間で、「自分探し」ということが流行ったことがあります。現在の予想される生き方を否定して、何かわくわくする生き方があるのではないかと。ありもしないことを空想して道を外れる風潮が社会現象になったのです。創世記では、アダムとエバはエデンの園で禁断の木の実を食べて神の怒りを受けて樂園を追放され一生額に汗して働かねばならなくなりました。日本人は、人と同じでなければならぬと言ひ強迫感を持っています。その中でキリスト者は少数者ですので、お仕着せではない別の生き方をもつてもよい自由があるかもしれません。

パウロは、ロマ書7章7節以下の「内在する罪の問題」という小見出しで、「わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。わたしは自分のしていることが分かりません。自分の望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです」(14節～15節)。18節～19節で、「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず望まない悪を行っている」と告白しています。

イザヤ書2章2節からの箇所、終わりの日に、高くそびえる主の神殿に向かって多数の国々、人々が来て主の山に登りヤコブの家に行こうと言います。「主は私たちに道を示される。わたしたちはその道を歩もうと。」主は真直ぐな道を示しますが、心の弱い私たちがその道を外れることが多いのです。一人一人の個性を生かしつつ信仰の友と共に与えられた真直ぐな道を歩みたいものです。
(文責:玉澤武之)

主題講演 「さまよえる羊」

古屋治雄牧師

最初に自己紹介として、私は、山梨市の葡萄農家に生まれました。川を挟んで勝沼市側には奥山雄輔さんの家があります。キリスト教とは無縁の家でしたが、友人に誘われて日下部教会に通うようになり、高校2年の12月25日のクリスマスに受洗しました。

4月に阿佐ヶ谷教会に赴任し、今日修養会に出っていますが、信友会には会員が築いてきた伝統を感じています。男性の部会は最近ではどこの教会でも維持できるものではないが、1泊2日の修養会ができる信友会には歴史の重みがあります。

今年度の修養会は主題に教会標語、副題に「さまよえる羊」です。最初に読む聖書は、教会標語ではなく、イザヤ書第53章6節を読みます。「わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方向に向かって行った。そのわたしたちの罪を全て主は彼に負わせられた」。

この聖句には、今回のテーマである「羊」と「道」が出てきます。今年の教会標語のイザヤ書2章3節「主は私たちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」を選定するにあたり、教会の苦難の時代を思い、また新しく主任牧師を迎える希望から会員が教会を支えて進もうとする信仰が感じられます。

「終末の平和」

イザヤ書2章3節は、前後の1節～5節の言葉と密接な纏まりの中にあります。小見出しは、「終末の平和」で、ユダヤの民の日常性を越えた視点で語られます。終わりの日は、神が創造された世界が完結され、歴史が完成される日のことです。2節で、終わりの日に、主の山は高くそびえ、国々は挙って大河のようにそこに向かい多くの民が来たのです。その時には神さまは、イスラエルの民ばかりでなく全ての人々を集めているのです。この日は、厳しい裁きにおびえるような不快感がなく神さまを中心としての歩みが始める。このような日であってほしい。2章4節は、有名な平和の聖句です。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げずもはや戦うことを学ばない」。ここでの終わりの日は、世界が大破局を起こし崩壊する時ではなく、神さまが歴史を完成して下さると言う視点です。

この2章1節～5節の前後では全く違う厳しい戒めが書かれます。1章21節で「どうして、遊女になってしまったのか忠実であった町が。そこには公平が満ち、正義が宿っていたのに今では人殺しばかりだ」と厳しく糾弾し、2章6節では、「あなたは御自分の民、ヤコブの家を捨てられた。この民がペリシテ人のように東方の占い師と魔術師を国に満たし異国の子らと手を結んだからだ」。この二つの厳しい審判の間に2章1節～5節が埋め込まれているのです。なお、1章27節では、「シオンは裁き





をとおして贖われ悔い改める者は恵みの御業によって贖われる」と救いと憐みが語られています。

イザヤの時代は。国が北イスラエル王国と南ユダ王国に分断され、北のアッシリアと南のエジプトとの狭間で厳しい駆け引きなど生き残る策に汲々とし、神に従う正しい道を歩んでいないのではないか、このままでは厳しい裁きがあることを預言したのですが聞き入れませんでした。そして北イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされています。

世界中から集められた民の行く先は主の山すなわちシオン、エルサレムです。2章4節は戦うことを学ばない平和の歌であり、ニューヨークの国連にこの言葉が英語で刻印されています。当時のイスラエルでは現実離れた社会で神の厳しい裁きを受けなければならない中ですべての民を救って下さると言うのです。終わりの日での平和な世界の希求は、今いる教会員だけではなく教会に来ていない会員も含めてこの言葉を聞きたいものです。

「神は厳しい裁きを通してその民を贖って下さる。裁きを受ける民はユダ王国の民ですが、その歴史を貫いて神の終末的導きが明らかにされたのです。それはもはや古いユダ王国の民のみではなく、世界の中から新しい主の民が集められ、主の御言葉に生き、そこに恒久平和が実現するのです。」

「さまよえる羊」

信友会では副題に「さまよえる羊」を選びましたが、これは会員一人一人の現実の信仰生活を考察することからでしょう。旧新約聖書ではこの「羊」は多様な形で書かれています。最初に①背信の羊として、「陰府に置かれた羊の群れ、死が彼等を飼う」(詩編49編15節)や「わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方向に向かって行った」(イザヤ書53章6節)。彼らは積極的に神に背いており、その背きを自覚しています。②さまよえる羊で「わが民は、迷える羊の群れ、羊飼いたちが彼らを迷わせ山の中を行き巡らせた」(エレミヤ書50章6節)、「テラフィムは空虚なことを語り占い師は偽りの幻を見、虚偽の夢を語る。その慰めは空しい。それゆえ、人々は羊のようにさまよい羊飼いがいないので苦しむ」(ゼカリヤ書19章2節)。ここでは指導者が正しく役割を果たしておらずその責任を問うています。③捨てられた羊として「神よ、なぜあなたは養っておられる羊の群れに怒りの煙をはき永遠に突き放してしまわれたのですか」(詩編74編1節)。ここでは羊自身が神の命令に生きることのできない姿があります。④羊飼いに従う羊たちとしては、詩編23編があります。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない」。この箇所は皆さん諳んじることができると思います。神に背くユダ王国は厳しい裁きを受ける立場と無条件に守って下さる安らぎとが両立していることを厳粛に受け止めるべきです。⑤回復される羊たち、「諸国の民よ、主の言葉を聞け。遠くの島々に告げ知らせて言え。イスラエルを散らした方は彼を集め、羊飼いが群れを守るように彼を守られる」(エレミヤ書31章10節)裁きを受けた民や全世界の民が集められる終末の日の喜びが歌われています。

さまよえる羊としてのイスラエルの民と今日教会生活をしている私たち、さまよえる羊か、背信の羊の違いはどこから来るか。ユダ王国の民は神の民として慢心して決定的に背信して、神の裁き即ちバビロン捕囚を受けた。多くの民は選民としての歴史は終わったと考えたでしょう。しかし旧約の神の救いは裁きを越えて訪れるのです。イザヤ書2章1～5節に戻り、厳しい裁

きの後に全ての国々の民が呼び集められ神さまの道が示されるのです。

「さまよい、背く羊たちを贖い、導く神」

ユダ王国の背信による神の厳しい裁きは、王国の滅亡として歴史として残っています。

新約聖書の時代になったら神の裁きは解消されたのでしょうか。新約の民の不服従を神はどう対処したのでしょうか。神はその不服従を自らの犠牲によって償おうとしたのです。そのヒントは旧約聖書の中にあつたのです。イザヤ書53章6節の後半部分に「そのわたしの罪をすべて主は彼に負わせられた」。ここに世界を変える神の御心の中心があつたのです。ユダヤ教本流では誰もが意識していない言葉が、聖書の神の計画の中心としてあつたのです。神の子であるキリスト・イエスの十字架と復活が現実になり、ペトロを初めとする弟子たちは、神さまがわれわれの罪をご自分で引き受けて下さったことを実感したのです。そして聖書を読み返し、イザヤ書53章6節からの「苦難の僕」に行きあたります。神さま自らがわれわれの罪を背負って下さった。その死は殲滅ではなく、人間の創造を越えた新しい希望となりました。神さまの裁きが御子の十字架と復活を通して完結したのです。

「この地上に神から遣わされた御子イエス・キリストが、地上の人間の背信の責任を神の前に負って下さったことによって、神の裁きが完全な形で断行された。主イエスの十字架の死は神の裁きを神の御子が受けて下さった出来事であつた」。

「道」、「羊」、「イエス・キリスト」

わたしは道であり、真理であり、命である。(ヨハネ 14:6)

わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。わたしにはこの囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。(ヨハネ 10:11, 16)

御子の十字架の死による救済によって、世界中の全ての人々が新しくつくりかえられ、平和の道を歩んでゆきたいものです。

(文責: 玉澤武之)

